

附属小学校における複式学級の創設過程と教育実践・研究

A Research on the Process of the Foundation of the Combined Classes and
Teachers' Study and Practice in those Days at the Attached Elementary
School to the Faculty of Education of Wakayama University

久保 富三夫

KUBO Fumio

(和歌山大学教育学部)

抄録: 小論では、附属小学校における複式学級創設期(昭和30年代。1955年度からの10年間)に焦点を当てて、設置の背景と目的を把握するとともに、当時の学級担任たちが意識的にとりくんだ課題と実践を明らかにしている。それは、単に過去の事実を知ることだけではなく、現在にも継承されるべきことが存在するのではないかと考えるからである。附属小学校における複式学級の設置は1955年度であり、1964年度までは1学級であった。1965年度から3年計画で、現在の形態である1・2年、3・4年、5・6年各1学級、計3学級の複式学級が設置された。設置目的は、第一に、複式学級が多数存在する和歌山県において、教員養成学部としてそれに対応できる教育実習を行う必要があること、第二に、複式学級における集団づくりと学習指導方法を研究開発し、へき地学校の要請に応えるためである。設置当初は、学級集団づくりに重点を置いた研究がやや先行しながら、少し遅れて、学習指導方法研究がしだいに盛んになっていった。1960年代後半からは、研究成果を直接にへき地教育、複式教育に還元する取り組みが意識的に追求されるようになっていった。

キーワード: 附属小学校、複式学級、へき地教育、教育実習、和田繁、山本義次、兜暢郎、『こども』

1. はじめに

和歌山大学教育学部附属小学校(以下、「附属小学校」と表記)における複式学級編制および複式学級・複式授業研究の歴史は長い。ところが、いつごろから、どのような経緯で、と尋ねると、附属小学校関係者においても正確に答えられる人はわずかであろう。また、複式学級創設期の附属小学校教師たちは複式の学級づくり、授業づくりにおいて、何を目指したのか、についてもあまり認識されていないように思われる。筆者も、つい最近までは、同校における複式学級は、当初から、1・2年、3・4年、5・6年の低・中・高学年の3学級であると思い込んでいたが、創設期においてはそうではなかったことが、小論執筆に着手して初めてわかった。

佐藤学・和歌山大学教育学部附属小学校『質の高い学びを創る授業改革への挑戦―新学習指導要領を超えて―』(東洋館出版社、2009年)においては、そのiii

章「(1) 複式教育について」の「和大附属小の複式教育」の項で、「複式学級は昭和42年に設置された。1・2年複式、3・4年複式、5・6年複式の3学級構成で、各学年11人で始まった。平成7年より各学年男子4人、女子4人の8人、1学級16人となり現在に至った」(58頁)と記述されている。紙幅の制約等から、現在の形態(複式3学級)が始まった1967年度に焦点を合わせて記述したものと推測されるが、附属小学校における複式学級の始まりの記述としては正確ではない。

小論では、附属小学校における複式学級創設期(昭和30年代。1955年度からの10年間)に焦点を当てて、設置の背景と目的を把握するとともに、当時の学級担任たちが意識的にとりくんだ課題と実践を明らかにしたい。それは、単に過去の事実を知ることだけではなく、現在にも継承されるべきことが存在するのではないかと考えるからである。

附属小学校における複式学級設置の経緯と目的を述

べた先行研究としては、山本義次「複式学級における学習指導の構造」¹⁾および兜暢郎「複式学級のあゆみ「10年は必要だ」」²⁾、それから、和田繁「複式2年」³⁾などが存在する。小論では、この3編の論文を中心に資料として、前述の研究目的に接近することを試みることとする。

したがって、小論は、筆者のオリジナルな論考というよりも、前述の先行研究を大幅に引用しながら（転載の場合もある）再構成して、読者に対して、附属小学校における複式学級創設期の経緯や苦難を紹介するものと受け止めていただきたい。

なお、引用する資料の記述は、文章表現やかなづかい、句読点の打ち方などにおいて気になる点が多々あるが、極力「原文のまま」記載することにする。

ただし、小論においては、数字は基本的にアラビア数字を用いているので、原文では漢数字であっても、特段の断りなしにアラビア数字に変換している。その点、留意されたい。

2. 複式学級設置の経緯と目的、その課題

諸資料から考えると、同校における複式学級の創設期の経緯は次のようなものである。

1955 (S30) 年度… 2・3年の複式学級設置

(2年生18名、3年生12名) 児童は他校から募集
学級担任：和田繁、寒川二三雄

1956 (S31) 年度… 3・4年 (3年生18名、4年生12名) 学級担任：和田繁、寒川二三雄

1957 (S32) 年度… 3・4年 新3年は他校から募集
学級担任：和田繁、寒川二三雄

1958 (S33) 年度… 3・4年 新3年は他校から募集
学級担任：山本義次

1959 (S34) 年度… 3・4年 新3年は他校から募集
学級担任：山本義次

1960 (S35) 年度… 3・4年 新3年は他校から募集
学級担任：山本義次

1961 (S36) 年度… 3・4年 以後、附属小学校2
年から3年・4年の複式へ 学級担任：南方久晴

1962 (S37) 年度… 3・4年 学級担任：南方久晴

1963 (S38) 年度… 3・4年 学級担任：南方久晴

1964 (S39) 年度… 3・4年 学級担任：中西 学

1965 (S40) 年度… 1・2年 学級担任：中西 学

1966 (S41) 年度… 1・2年 学級担任：藪田英二
3・4年 学級担任：辻 靖司

1967 (S42) 年度… 1・2年 学級担任：藪田英二
3・4年 学級担任：辻 靖司
5・6年 学級担任：吉田富哉

1968 (S43) 年度… 1・2年 学級担任：広瀬正文
3・4年 学級担任：辻 靖司

5・6年 学級担任：吉田富哉

前掲の表に記載したように、同校における複式学級の始まりは、1955年度にさかのぼる。しかも、初年度は、2・3年の複式1学級であり、各学年とも市内の小学校から募集して編制したものである。この点について、前掲の兜論文では、「当時の校長玉置修先生のご指導のもとに複式3、4年学級1クラスの設置が決定され、初代担任として和田繁教諭、副担任に寒川二三雄教諭を迎え、奥山の地、育友会館を教室として発足した」(9頁)と記述されている。兜論文では「複式3、4年学級1クラスの設置が決定され」と記述しているが、和田繁「なかまを育てる—自由時の観察を足場に—」⁴⁾では次のように述べている。

「4月に入学したこのクラスの子どもたちは、ほとんど異なった学校で、したがってそれぞれ特定の学級集団の中で1年乃至2年の生活を経てきた。だから互いに顔なじみはなくきわめて孤立的な心理状態をもって出発した。初めての学校、新しい教師、そして複式という少人数のクラス、一すべての面で第2の学校生活がはじまったにひとしい。入学当初はまことに神妙。お互いに堅いからの中にとじこもってはなしのやりとりも少ない。そしてよりどころのない不安げな表情である。一方的な教師の話しかけに一方的な答えのいく日が続いた。しかし日をへるにつけ、お互いの名をしりもののかしあい、とりあいといったかんたんなかんけいから集団生活の出発がのびていった。」(27～28頁)

複式学級発足年度の、しかも学級担任の記述であるから、和田の記述が正確であると考えられる⁵⁾。また、前述の山本義次「複式学級における学習指導の構造」においても、「学級の児童は最初は2・3年の子どもを市内から募集して出発したが、2年目からは3・4年の複式学級として固定し、3年目からは4年生を新5年として普通学級へ送ると、新3年生を又市内から募集して組織することにした」と記述されている。翌1956年度には、前年度の2・3年生が3・4年生となり、以後、1960年度までは、同様の方法で3・4年生1学級の複式学級が編制される。資料不足のため、断定はできないが、「この学級の新3年生は市内の普通学級から募集して入れた子どもである(来年度からは本校の2年生から入れることになる)」(山本論文、166頁)という記述から考えると、1957～1960年度の3年生は、同校の2年生から進級してきた子どもたちではなく、新たに募集して編制していたように思われる。

それが、1961年度からは、同校2年生から進級してきた子どもにより複式学級の3年生を編制するようになったものと考えてよいだろう。

山本論文は、複式学級設置に至る経緯を丁寧に記述している貴重な資料であると思われるので、筆者による再編や部分的引用を禁欲して、現在の附属小学校教職員をはじめ多くの方に読んでいただくために、とても長くなるが山本論文の「1. 附属小学校の複式学級設置と今日までの」の前半部を引用（転載）する。

今和歌山県の複式学級数の現状をみると左記のとおりであって、へき地教育の振興、複式教育の振興は教育行政の大きな課題となっている。

和歌山県小中学校の複式学級

(昭和35年5月1日現在)

	本校	分校	計
小学校総数	363	77	440
(うち複式のある学校数)	88	60	148
学級総数			3528
(うち複式学級総数)			317

	本校	分校	計
中学校総数	169	21	190
(うち複式のある学校数)	1	7	8
学級総数			1440
(うち複式学級総数)			8

ところが教育界においては、口を拓けばへき地教育、複式教育の振興を叫びながらも、人事や経済の面などで行き悩んでいる有様である。その一つとして、へき地においては熟練した有能な指導者を熱望しているが、現在の人事交流のしきたりからすると、新しい卒業生の大部分がそのへき地に送りこまれ、漸く熟練した教師は里へ里へと下ってくるという仕組みになっている。そして新任教師の多くは、好むと好まないにかかわらず、複式学級の指導に直面するのである。新しい卒業生に力がないというのではないが、複式学級の指導には相当な経験と技術が要求される。経験の浅い新任教師の困惑は明らかであり、地域の要求として、又教師自らの要求として、大学や付属校にへき地教育や複式教育研究の機会と場を作ってほしいという要求の生まれるのも当然であろう。

又、昭和26年文部省からも次のような通達が出されている。

○文大教第870号通達(12月27日付)

付属学校における複式学級の研究について

「複式学級の多い地方に於いては、その研究は地方的にきわめて重要な問題であり、又学級編成方法についての研究も役立つものと存ぜられますので、是非複式学級を設け、この方面の研究を進め

られるよう御計画願います。」

そこで当時の校長玉置教授は、これ等の要求に答える為に複式学級の設置を提唱し、非常な熱意によって教官会議を指導されたことも記憶から消し得ない事実である。

しかし複式学級の誕生はかんたんではなかった。多くの生みのなやみの後に漸くにして生れたものである。それは以上のように設置の必要と意味はわかりながらも、次の諸問題にひっかかった。

その1は、文部省は複式学級の設置をすすめながら、それは現在の機構と予算内での事であり、新しい設置については、予算上の配慮はされていない、だから設置するとすれば、現在の学級数と職員組織の中で考えなければならない。しかし普通学級は教生受け入れの立場からみると、これ以上減らすことは出来ない、とすればやみ学級の設置よりほかに方法がないということになった。だがそれはただでさえ忙しい私たちに過重な負担が加わることになる。

その2は、複式学級設置の地域的な必然性のない都会において、無理に作った複式学級が、どれだけへき地の要求に答え、サービスすることが出来るかという疑問であった。

これらの問題について、約1ヶ年程真剣な研究討議を重ね、設置の可否論がたたかわされた。しかし1の問題はへき地教育の振興を重視する県教委の協力と、大学の理解のもとに、複式指導教官1名の定員を借りて漸く解決し、2の問題については、たとえ地域的な必然性はないとしても、編成されるこどもの発達段階には変りなく、そのこどもの持つ問題も環境こそちがえ殆ど同じはずであり、ここで実験される学習指導の方法原理が、役にたたないといいきることは出来ない。(若しこれが否定されるとすれば、他の付属の普通学級も同時に否定されることになる。)という結論に到達しいよいよ設置にふみきったのである。(145～147頁)

附属小学校における複式学級設置の目的は、前掲の山本論文でも記述されているが、和田は次のように端的に述べている。1955年度の複式学級創設に学級担任として関わった教員が1957年度末に記述したものであるから、事実を反映しているものとみてよいであろう。

「複式学級というのは普通、通学する子どもの少ない山間僻地や小さな島などにあって都会地や平坦地にはありません。それでどうしてこの学校に設置されたかと申しますと

1、教育実習上必要である。つまり新しく教壇に立つ人には僻地の複式学級を担当する人がいる。こうした実際的な問題から。

2、複式学級の指導には単式では考えられない指導上の技術的工夫や学級経営上の問題があり、これを僻地の先生方とタイアップして研究する。」⁶⁾

また、創設期の苦難については、山本が「教室はその当時まで友友会館としてつかっていた奥山の独立教室をあて、机はそれまで家庭科の裁縫机にしていたものを改造し、腰掛はこれまた物置からひろい集めるなどの急ごしらえ、教室からは屋根のない坂道を通してその教室に通わなければならないという悪条件、雨の降った日は傘をさして教室に向かう和田教官の姿は気の毒な位であった」(147 頁)と述べているように、きわめて貧弱な施設・設備からの出発であった。

3. 複式学級の確立

発足当初の1955年度から3年間、複式学級を担当した和田と寒川を継承して、1958年度から3年間担任を務めたのが山本義次である。なお、山本は複式学級が設置される以前から附属小学校に在籍し、兜の後、1966～1968年度には教頭として学校運営を担ってきた人物である。

兜は、「複式学級のあゆみ「10年は必要だ」」において、山本担任時代の複式学級における前進として次の2つのことを挙げている。

「●複式委員会の設置

複式学級の指導は担任だけではなく、他の教官も実際指導を行い全校を挙げて複式教育の研究を進める体制を作ると共に、校内に複式委員会を設置して、研究と運営を推進することにした。

●教育実習態勢の確立

教育実習においては、複式学級に配当された一部実習生だけの問題におわることなく、全実習生が経験できるように、複式指導の講話を聞き、授業を参観し、指導案を作り、実際指導を試み、協議することのできる態勢を打ち立てた。」⁷⁾

前者の「複式委員会の設置」について、山本は、複式教育研究委員会（これが正式名称のようである）を設置し、複式学級には次の3つの意味があることを校内的に合意することに努めたと述べている。これらは、1955年度の設置当初に掲げられた前述の目的（和田論文）とほぼ共通しているが、新しく（3）が付加されたことが重要である。

「(1) 複式学級の多い和歌山県の教員養成大学としての立場から、実習の場として、その存在は強く要請される。

(2) 複式学級に於ける学習指導法の研究は和歌

山県としての地域の要求に答えるものであり、又普通学級では行い得ない特殊な指導法の実験の場としても役立つ。

(3) へき地の先生とのつながりを持ち、和歌山県の実態に即した研究が出来る。」（山本論文、148 頁）

また、大学に対して、「(1) 教育研究所から複式教育研究の指導教官を派遣してもらいたい。(2) 共同の実験問題を持ち、実験問題に応じて、大学から指導教官を派遣してほしい。(3) 複式学級指導教員の定員の給与は大学でまかなえるようにし、県にたよらないようにしたい」と3つの要望を提出したことを述べている。このうち、(3) については、当時の校長および教頭の努力により実現し、それが複式学級担任としての彼の教育実践を大いに励ましたこと、また、(2) については、自ら大学教員に指導を乞うことにより、ある程度目的を達しているが、(1) については、今なお実現していないと述べている。この点は、その後、今日に至るまで、附属小学校における複式学級が全国的には注目されながらも、状況はあまり進展していないのではないと思われる。本学の『学芸学部紀要』や『教育学部紀要』、あるいは『教育実践総合センター紀要』を見ても、大学教員による附属小学校の複式教育に関する論考は管見の限り見当たらない。小論を執筆する過程において筆者には意外であったことであり、また、大変気になることでもある。

4. 創設期の担任の問題意識と教育実践・研究

4.1. 学級集団づくり

複式学級初年度の『こども』第10号(1955年10月)に掲載された和田繁論文の題目は、「なかまを育てる—自由時の観察を足場に—」であり、まさに、学級集団づくりが、「こどもたちの日常生活ないしは学習指導に大きな力をもつことであろうし、それは同時に一人一人のパーソナリティに深いつながりをもってくることであり、また、研究的には、「学校教育における単式学級と複式学級との学級社会の比較にも意味をもってくることであり」という問題意識を披歴している(27頁)。

複式学級出発時の学級の様子は、先に引用したとおりであるが、和田論文では、「1 集団母胎の発生」として、5 月半ばすぎの自由時(休み時間)のこどもたちの動きを運動場でボール遊びをするG1 グループ(3年生のMを除く全員と2年生の2名)を中心に観察・記録している(6月6日。A図、28頁)。

次に、「2 集団の拡張」では、1 ヶ月後には、G1 グループが拡張している様子とその要因が記録されている(7月6日。B図、29頁)。そして、「3 集団の自然成長の限界」では、2 学期に入って野球がさかんになり、そのことにより、G1 グループがさらに拡張し

ていることとG1にはいないG2グループ(集団としての結びつきは弱い)が形成されていることが記録されている(9月12日。C図、29頁)。やがて、G2から2名⁸⁾がG1にはいり、G2は2名のみとなる(9月26日。D図、30頁)。

和田は、彼らの遊びを通してこのように観察したのち、印象的なこととして、①2年生の活躍、②2年3年の友愛関係が目立つこと、③一人一人が葛藤的な場にどうしてもたたされること、④個人のよこびが集団のよこびとかさなりあうこと、の4点を挙げている。

そして、和田は、「(3) 社会的孤立(消極集団)」の項で、G1グループに属さない2名の子どもに着目し、「一体これらの事実の上に立って孤立児の指導はどうあるべきだろうか」と自問し、「現在考えつつある指導の仮説」を述べている。

「(4) 成長のふし

ここで一応結論めいたことをかいておこう。一人一人のこどもの行動は長い間につくられた習慣—固定化された行動の傾斜によって決定される。こうした習慣(態度)を変えていくものは新しい経験である。今までの自分では適応できないことをしたときその子の飛躍がある。飛躍するために葛藤、歓喜という門をくぐらねばならない。私たちはこどもの飛躍—成長の階段を意図的に、設けねばならないし、またこの時機をこども自身の一時的な現象に終わらせず、それがこどもにいつまでも、自覚された思い出として(それが次の飛躍に意味あるものとして)記念してやるよう配慮しなければならない。

新しい経験を与える場は今の家庭に臨むところすこしとすれば、それは人為的に設定された学級集団という場においてである。学級集団或は集団教育というものが、こどもたちに対して意味ある抵抗として位置付けたい。」(33頁)

筆者には、和田のこども集団分析の適否、妥当性を判断する力量はない。ただ、強く感じるのは、複式学級における集団づくりの指導方法を模索しながら見つけ出そうとしている研究的・分析的姿勢である。

副担任として担任の和田と共に複式学級を担当した寒川二三雄は、『こども』第14号(1957年3月)において、「集団の中で育つもの—複式学級に於ける<フットベースボールの指導>—」と題して、和田の指導仮説⁹⁾を継承し、体育の授業における教材の選択、教材の研究を詳細に行っている。その内容については割愛するが、末尾に「4 これからの問題」として次のように課題を述べている。

「仲間が育てられ、みんなの力が一つの目標に向かって結集された時、大きな力と成って表れることを知った子供達は確かに強い自信を得た。

然し、こゝで一步踏み出して考えなければならぬ事は、みんなで得た自信を一人一人の自信として持ったであろうか、彼等は確かにお互同志の練絡の必要性を知ったが、そのお互の中に自分を忘れていないだろうか。自分も1枚加わっているのだ、自分がいなければチームは駄目なんだという自尊心を持ったであろうか、それは又、一人一人が窮地に追いやられた折、それを切り抜けて行けるだけのねばり強さ、すなわち、自分自身を鍛錬して行けるだけの力となっているかということである。

この点にまだまだ問題が残されており今後の複式教育研究の余地があると思うのである。」(42頁)

4.2. 学習指導の方法

前項では、学級集団づくりの取組、研究について述べたが、もちろん、それは学習集団作りとも一体をなすものである。そして、もちろん学習指導そのものについても、複式学級設置時から研究が始められている。

前項で紹介した寒川二三雄「集団の中で育つもの—複式学級に於ける<フットベースボールの指導>—」は体育の指導論でもあるが、教室での学習指導については、和田繁が「複式2年」¹⁰⁾の中で「学習の形」として、考察している。

「学習の形」を論じる前に、和田は同論文において、大変興味深いことを述べている。

「こうしたこと(前述の寒川氏の実践…筆者註)を経験してきたわたしは学年とは何かということに疑問をもちはじめました。3年生といい、4年生というのは一体、何のしるしなんだろうか。

1 行政上の呼名としての学年。……

2 指導計画を立てる上からの学年というものがある。……

以上二つはたしかに学年という意味をもっているようです。しかしそれは具体性のない半抽象的なものとなり、これにこだわっていると複式指導というものは全く困難なものになってしまうでしょう。そこで

3 学習指導の実際からみると、指導される一人一人が問題なのであって、きわめて具体的なこどもの姿が教育の対象となってくるのである。こうなると、抽象的な学年というものは論外となり、一応の目安にしかすぎず、複式も単式も同一の立場をとらざるを得なくなる。」(30頁)

そして、和田はこう続けている。

「たとえば4年生という単式学級においてもある子は5年生ほどの力を持ち、ある子は3年生に及ばぬ力をもっているというのが事実なのでありますから当然個人の力をぬきにした抽象的な4年生

指導が成立しなくなります。こうして考えてみると複式学級もそれと全く同じことがいえるので生年月日の巾が単式より1年広いというだけの差となってしまう。学年差ということもほんとうにはあり得ないので、個々のこどもの実態から指導技術が生まれるとすれば、あり得るものはこどもの個人差なのです。……そこに3年生も4年生もないのです。あるのはA君でありB君なのです。」

(30～31頁)

筆者は、和田がとても本質的なことを認識しているように思う。そして、この観点は、一人ひとりのこどもをより丁寧に観察し把握することにつながるものであるように思われる。

このように設置当初から学習指導の研究が進められていたが、複式学級の学習指導における研究を大きく発展させたのは、1958～1960年度にかけて学級担任を務めた山本義次であるといえる。山本は、「複式学級における学習指導の構造」の「2. 複式学級における学習指導の基本形体」で、「複式学級としての形体から必然的に生まれて来る学習形体」として、(1) 同時異教科異教材、(2) 同時同教科同教材、(3) 同時同教科同題材、(4) 同時同教科同教材(1本案と2本案)の4つを挙げている。なお、「1本案」とは、「3、4年共1ヶ年でまとまった指導をする。次年度も又同じものをやる。但しこの際は3年と4年の目標に差をつける。又は教材の取り扱いをかえる」ということであり、「2本案」とは、「3年と4年の教材を一たんばらばらにして、A年度とB年度に組みかえてそれを交互にあたえる」ことである(150頁)。

そして、(1)を除く(2)(3)(4)の形式を「特にすぐれた複式指導の熟練者、又は特攻隊的な人間でなければ出来ない形でなく、誰でもが行い得る形で、しかも他の普通学級に負けないだけの効果を挙げ得る形」を「かたっぱしから実験して、最も適当な形をさぐることにした」結果、山本は、実践と研究を通じて、次のような「複式学級における学習指導の原理」に到達した。

「複式学級における学習指導を高める道は、次の2つのことを達成するにつきと考える。その1. 自学の態度を育てること、その2. 能力差に応じた指導、それは、複式学級は2個学年の子どもが、同時に同教室で学習するのだから、今若し、40分の時間を直接指導、間接指導に配分した場合、1ヶ学年のこどもには20分しか取れなくなる。それで直接指導のみを教育と考えて、それにたよれば、普通学級の半分しか出来ない勘定になるのは当然である。だから半分の間接指導の時間が問題なのである。この間接指導の時間を如何にするかの工夫が、複式の学習方法解決のかぎである。すなわち教えないで学ばせる方法、こどもが自ら求め、

考え、学んでいくことの可能な、時間的、空間的な環境の工夫が大切なのである。

次に考えられることは、3年4年という学年であつても、それを学年をはずしてみた場合、2年間の成長歴の中における単なる能力の傾斜としてみることが出来る。だから3年4年という概念にとらわれることなく、個人の能力差に応じた指導方法が取られるなれば複式という形体はもう問題にならなくなるのである。」(151頁)

さらに、「学習指導の工夫」として、算数(「自学の態度と能力差に応じた算数学習の指導」同時同教科異教材)と国語(同時同教材の国語学習)の実践例について紹介している。

前者(算数)は「学習カード」と「解答調べ」を軸に(よく工夫されていると筆者は思う)それらを「整理棚」と結合させているところが注目される。後者(国語)は、3年生と4年生の能力水準の重なりを実証的に解明しようと試み、次に、自ら考案した「手引きによる学習」を紹介している。

山本は、「異学年児童の相互作用」に言及し、さらに、「教生指導の場として如何に利用するか」についてもその取り組みを述べている。

「実習の場としては未だ十分ではないが、一昨年度から次のように利用している。1回の教生の数は大体3、40名であるが、それを各学級に配当すると、1学級3名位になる。すると実際に複式学級を経験する人の数は3名位になって、これではせっかくの複式学級も、全教生のためには意味が無くなる。それで次のような方法で全教生に経験させることにした。

それは実習期間中に3日間、複式研究日を作り、第1日は複式学級配当の教生が研究授業をし、それにもとづいて複式指導、へき地教育の講話及び研究協議を行う。

第2日、第3日は全教生を2グループに分けて実習させる。1グループについて2教科2教材をあたえ、グループワークで教材研究をし、指導案を作成し、代表が授業をする。そのあとでみんなで授業の評価をして、複式の授業を主体的に自分のものとしての立場から経験させるのである。だからすべての教生が一応は授業に参加し、わずかも複式学級に対する認識の機会が得られるわけである。

こうして昨年度大学を卒業して行った教生の中から、付属で複式の実習をしたおかげで、まごつかに教育に従事することが出来るという手紙を受けたとき、最小限この1人が複式の存在価値をはっきりと証明してくれたとうれしくてたまらなかった。尚このほかにもまだ何人かの人がこれを意味づけてくれるだろうことを信じて、更に複

式の教育に前進して行きたいと考えている。」
(167～168 頁)

5. 複式 3 学級設置までの経緯

複式学級は、設置時の学級担任である和田・寒川、そして、彼らの努力を基礎に集団づくりと学習指導、および校内組織の基盤を整備した山本から、1961 年度には南方久晴に継承された (1963 年度まで)。

また、1964 年度から 1965 年度にかけての 2 年間は中西学が学級担任を務めている (1965 年度は 1・2 年の複式学級)。

南方担任の時期の特徴は、第 1 に、それまでの 6～7 年間に蓄積してきた複式学級の理論と実践を広く県内のへき地学校の教育活動に還元するための取組が開始されたことである。

第 2 に、1962 年度に生じた複式学級存続の最大の危機に直面した附属小学校の教職員が複式学級存続に対外的運動を展開することにより、1967 年度からは、創設期の約 10 年間と比べると飛躍的に安定的な複式学級設置を実現したことである。小論の冒頭で紹介した「複式学級は昭和 42 年に設置された。1・2 年複式、3・4 年複式、5・6 年複式の 3 学級構成で、各学年 11 人で始まった」¹¹⁾と記述されていることである。

ここでは、兜暢郎「複式学級のあゆみ「10 年は必要だ」」¹²⁾に全面的に依拠しながら、当時の状況を紹介することにする。兜は、複式学級が設置される以前、1951 年度半ばから附属小学校に在籍し、1960 年度から 1965 年度までは教頭として学校運営の中心的役割を果たしていた人物である。先に、山本義次論文の長い引用 (転載) をおこなったが、同じ趣旨により、兜論文の「第 2 期 (外部への働きかけと正式認可への運動時期) 昭和 36 年—現在」(10～13 頁) を引用 (転載) する。なお、項目の表示方法については、読者に分かりやすいように、筆者により若干の修正を施している。

●第 2 期 (外部へのはたらきかけと正式認可への運動の時期) 昭和 36 年—現在

担任は南方久晴教諭と更新した。既に複式学級研究の基礎は固まった。数年にわたる研究と経験は受け継がれ蓄積されてきた。

その研究成果を発表するとともに、当校の複式学級存在を広く県下に周知することも、使命を遂行する上に大切なことであり、

ひいては、複式学級の正式認可への手がかりになることでもあったと考えた。

(1) 第 1 回複式教育研究協議会開催

昭和 37 年 6 月 18 日、和歌山県教育委員会、同へき地教育研究会の後援によって、はじめての複式教育研究協議会を開催した。

子どもを連れて一家総出で参加するへき地学校の先生方の姿も見られ、複式教室は汗と、人いきれと、そして熱気でむせ返った。

県下へき地学校の教員が一堂に会したのは、戦後はじめてであると、参加の人々から大いに感謝もされた。又、へき地教育にたずさわる先生方の研究に対する熱意を膚で感じとることもできた。この協議会を通して、付属の複式学級は県下の複式学級として脚光を浴びることになった。

(2) 予算外学級廃止の通達が出る。

思いもかけず、複式学級創設以来の最大の障害が前途をはばんだ。それは、昭和 37 年 12 月 19 日付の文部省大学学術局長名による、「付属学校における予算外学級について」の通達である。この通達の内容は、全国の付属校で国費以外の費用、例えば県費、P、T、A、会費等によって維持している学級、即ち予算外学級 (いわゆるやみ学級) を早い機会に廃止するようにということである。当複式学級は前に述べたように国費の裏付けがなく予算外学級である。従ってこの通達により廃止の瀬戸ぎわに追いつめられたのである。

直ちに今後の処置について協議された。教官会議は、万難を排して複式学級を存置する方針を決定した。

まず、校長名にて具申書を学部長に提出し、複式学級の残置を文部省に交渉していたべくようにお願いをした。

又、県教育委員会並に県へき地教育委員会¹³⁾にも協力をあおぎ、複式学級の存置について、当局に強くはたらきかけた。

当時の学部長今崎秀一先生並に学部関係の方々の御尽力により、1 年間の猶予を与えられることになった。この 1 年間に於て、複式学級が正式に認可されなければ、廃止のやむなきに至るのである。この 1 年が、複式学級の運命を決する年である。

近畿付属連盟の会合に於て、実情を話し協力をおねがいし、大いに激励されたことも忘れ得ないことである。

学部は昭和 39 年度の概算要求の中に、複式学級の設置を上位に取上げ文部省に提出して下さることになった。又、あらゆる機会を利用して文部省に強力にはたらきかけて下さることを約束してくれた。

しかし、他力本願ではいけない、自分たちの努力で、複式学級残置の世論を県下教育界に起こさなければならないと考えた。

(3) 第 2 回複式教育研究協議会の開催

昭和 38 年 6 月 15 日、和歌山県へき地教育研究

会との共催、県教育委員会後援の協議会を昨年について開催し、講師として、全国へき地教育連盟常任理事、東京都立教育研究所、渡辺ユキ先生をお迎えした。

そして、協議会の席上、校長より、当校複式学級の実情を細かく話し、複式学級は正式認可されなければ、本年度で廃止になることを説明した。参加の方々は、付属校が多分に犠牲を払って複式教育を推進していることを、はじめて知り、感謝するとともに今まで通り複式学級の存置を要望し協力を決議した。講師の渡辺先生も、全国へき地教育連盟としても、文部省にこの実情を述べ設置に努力しようと約束してくれた。協議会は盛会裡に、しかも、吾々の希望をふくらませて終了した。

その後、7月21日、夏季休暇に入るとすぐ、学部事務長に同道して上京、文部省に和歌山県の実情を述べ、複式学級設置の必要を説明して懇請をした。同時に、全国へき地連盟の事務局を訪れ協力をお願いし、国会関係の方々にも面会して協力を願った。1年中で最も暑いはずの7月末、東京の街をかけずり廻りながら、大した暑さも感じなかった。この年の東京は例年になく涼しかったことが印象に残る。

出来得るすべての手は尽くした。あとは決定を待つばかりである。

(4) 文部省の予算要求にとり上げられる。

努力が稔り、文部省は当校に複式学級設置の必要を認め、大蔵省への予算要求の中にもり入れられることになった。複式学級設置は一步前進したことになる。

しかし残念なことには、この年は大蔵省の査定に削られ設置は実現されなかった。けれども文部省が、その必要を認めてくれたことは、吾々に自信を持たしてくれた。実現するまで何回でも要求しようと決意した。学部当局も同意してくれた。

このような設置に関した仕事を進める一方で※研究の面も日々に深められた。

県下各地からの要請により、南方教諭が現地に出て指導することが多くなってきて、当校の複式学級は名実ともに県下の指導的役割を果たすようになった。

※複式学級における学習指導

自主的な学習態度を育てる

南方久晴（こども33号）

昭和39年4月中西学教諭が担任となる。そして、新しい角度よりの研究がはじめられた。同時同単元指導の検討と、それに関係して、間接指導に於ける学習の手引きの研究を進めることになり、6

月の全校研究発表会の機会に、現地複式学級担任の参集を求め、現地の方々の意見を聞き、現地の実情に即した研究を行うよう努力をしている。

(5) 再度概算要求を提出する。

昨年につき、複式学級設置の要求を大学より提出する。

7月中ごろ文部省に状況説明のため上京する。その際、本省の係官の助言により、現在の複式3、4学年の1学級の認可にとどまらないで、3学級として完全なかたちで要求するほうがよいということを知り、学部とも相談の上、改めて、3学級設置を要求することになった。そして、この要求が文部省をとおり、大蔵省に於いて査定される段階にきた。最後のひと押しが必要であり、関係の要路の方々をお願いをすることにした。

このような努力がみのり、昭和40年1月5日に、複式学級の予算化されたの朗報に接したのである。

しかし、これから3年、複式学級を完備するために、一段と努力が必要である。又、複式学級設置のための御支援に報いるためにも、より良い研究を進めるための県下複式教育に貢献を致さなくてはならないと痛感している。

最後に、あらためて、10年の間、非常なご支援、御協力をいただいた大学当局、県教育委員会、県へき地教育研究会、全国へき地教育連盟、その他の方々並に付属校校友会に対し、深甚の感謝を申上げて筆をおく。

6. 学習指導研究の発展

紙幅が尽きかけているので、1962～1963年度に学級担任として奮闘した南方久晴の学級経営・学習指導研究については、ごく簡潔に紹介することしかできないし、中西学のそれについては「馱ではたらく人々」(1・2年複式、同単元指導)¹⁴⁾の存在を記すのみでご容赦を願いたい。

南方は、「学習指導を深める—特に複式学級における国語科同単元更に同教材化への前進のために—」と題する論文を、『こども』第31号(1962年11月)に発表している(50～61頁)。

南方は、授業を、「ひとり学習」→「むすび学習」→「ひとり学習」というように構成している。おそらく、南方の学習観を最も如実に表現している箇所は次の部分であると思われる。なんとすぐれた、現在の教育課題であること、子どもだけではなく今日の私たち大人にも求められている課題を、当時の南方が意識していることに、筆者は心から共感するものである。

「自分の考えたことと友だちのいろいろな考えを

結びあわせながら、その中でハッとして問題点についての解答を見つけ出したり、自分の考えを友だちの意見とのかみあわせの中で肯定したり、又批判したり、否定したりしながら、自分の考えを建設していける子どもひとりひとりの姿をみることが出来ます。

・学習の過程で、子どもひとりひとりの考えは容易に友だちの中に昇華してしまわないこと。

・自分の考えが根底にあって、どこまでもこれを元にして、友だちの考えを消化していること。

これらのことは自分の視野の中から友だちの意見を聞きわけているということですし、友だちの考えを消化したり否定したり、育てていく根底に、自分ひとりの太い考えが1本強く筋が通っているということをも意味しています。

ここに、私の考えている学習指導の基本課題があります。」(53頁)

また、南方の「自主的な学習態度を育てる」という題目の論文が、1963年9月に発行された『こども』第33号、47～57頁に掲載されていることを付記しておく。

7. おわりに

筆者には附属小学校の複式学級の歴史についてまったく研究蓄積がない中で、しかも、定年退職間際での小論執筆には、率直なところとても複雑な思いで取り組み始めた。しかし、昭和30年代の複式学級設置にあたられた和田繁や山本義次をはじめとする歴代の学級担任や兜暢郎の労作に触れるうちに、どうしても、先人たちの苦勞と努力を今日の附属小学校関係者や教育学部教職員の方々にお伝えしなければならない、というある種の使命感のようなものが湧いてきた。不思議なことである。

もちろん、資料としては、ほぼ『こども』誌と本学『学芸学部紀要』に依拠するのみで、論述を裏付ける当時の一次・二次資料（とくに、複式学級設置が県内のへき地教育にどのように貢献したのか、について客観的に明示する資料）¹⁵⁾に当たることができなかったことは、40代前半からの研究活動の中で、常に「はいずりまわる」地道な研究スタイルを心がけてきた筆者にとっては苦痛であった。さらに、教育行政学・法学・制度学研究者である筆者には、小論で紹介した教師たちの学習指導や学級集団づくりについての評価ができかねたことも、心苦しいことであった。小論は、それらに起因する不十分さが否めないことを率直に表明しておきたい。

最後になったが、これらの不十分さを内包しながらも、とにかくにも、附属小学校における複式学級創設期の歴史と先輩たちの苦勞をなんとか論述することができたのは（ほとんど引用・転載であるが）、なんともいっても辻信幸教頭のおかげである。辻先生は、複式

学級創設期関係資料の所在把握に関する私の依頼を受けて、多忙な校務の中、校内資料を精査してくださり、学芸学部時代の校内紀要である『こども』誌を教示して下さいました。辻先生のご教示なしには、小論を書くことはできなかった。また、貴重な『こども』誌を快く一括貸し出ししてくださった船越勝附属小学校長にも厚く御礼申し上げる。『こども』誌を研究室に借り出すことができなかったら、小論はまったく書けなかったに違いない。

註

- 1) 和歌山大学学芸学会編『和歌山大学学芸学部紀要 教育科学』第9号、同、1960年10月、145～168頁。
- 2) 松下忠編『こども』第37号、同、1965年3月、8～13頁。なお、和歌山大学学芸学部附属小学校の紀要である『こども』誌の編集者・発行者は学校長名となっているので、それに従った。
- 3) 片山頼太郎編『こども』第14号、同、1957年3月、29～34頁。
- 4) 片山頼太郎編『こども』第10号、同、1955年10月、27～33頁。
- 5) ただし、和田は1957年3月発行の『こども』第14号に掲載された「複式2年」の冒頭で「この複式学級がうまれたのは1昨年（すなわち1956年）の春です（ずっと前にも設置していたらしいですが）」と述べている。この「ずっと前にも設置していたらしいですが」については、筆者はまだ解明できていない。
- 6) 「複式2年」片山頼太郎編『こども』第14号、同、1957年3月、29頁。
- 7) 前掲『こども』第37号、10頁。
- 8) 和田は、この2名の児童について、学習活動ではリーダー性を発揮するが、グローブを持っていなかったため、「進んで入っていこうとする気落ちを弱めていた」と分析している。
- 9) 前掲『こども』第10号、27頁。
- 10) 前掲『こども』第14号、29～34頁。
- 11) 佐藤学・和歌山大学教育学部附属小学校『質の高い学びを創る授業改革への挑戦—新学習指導要領を超えて—』東洋館出版社、2009年、58頁。
- 12) 前掲『こども』第37号、8～13頁。
- 13) これは、県へき地教育研究会の誤記であると思われる。
- 14) 南佐三編『こども』第39号、同、1965年10月、39～46頁。
- 15) 熟読すべきであった書籍・資料としては、次のものがあるが、主に執筆時間の制約から活用することができなかった。忸怩たる思いでいっぱいである。読者においては、これらの文献にもお目通しいただき、小論の不備を補っていただければ幸甚である。
・和歌山県へき地教育研究会・和歌山県へき地教育

振興会・和歌山県複式教育研究会編『和歌山県へき地教育二十年史』和歌山県へき地教育研究会、1970年。

- ・和歌山県教育委員会総務室編『へき地教育調査報告書』同、1955年。
- ・和歌山県教職員組合へき地対策部編『わかやまのへき地と教育 実態調査 山の子供たち』同、1956年。
- ・文部省調査局調査課編『へき地教育の実態 昭和30年度 へき地教育の調査報告書』文部省、1956年。
- ・全国へき地教育研究連盟編『へき地教育20年—その歩み・成果と展望—』同、1971年。